





水

陽太	
6	29
月	日
18	12
日	月
行	子
原稿	校

特
4424
15

しん。

十四日、青山齋場で行われたので、自分も會葬

野口寧齋が五月十二日に死去。その葬儀は

明治三十八年の初夏

野口寧齋死す

江見水蔭

一〇自己中心明治文壇史〇十八

泡沫の浮遊

二〇号

一〇

一〇

No. _____

三

水 2

病軀を思ひて、
 寧齋の ~~病軀を思ひて~~ 何者か接近せぬ。彼は
 己むふく自分の病 ~~病軀を思ひて~~ 夜通し
 飢り明かやうと言ひ出したりで、これこそ自
 分も恐縮して ~~病軀を思ひて~~ 城を明け
 この寧齋の死は、彼の少年腎肉切の ~~病軀を思ひて~~ 男三郎
 が拘りてあやうきは ~~病軀を思ひて~~ 当時 ~~病軀を思ひて~~ 思ひて ~~病軀を思ひて~~
~~病軀を思ひて~~
 この十一日は、秋篠夜夜で、文士、画家、劇
 評家の通人揃りで、若葉會の名で、素人演劇が上
 演した。八寅彦、雁阿彌、鬼右郎、梅雪、柳

寧齋は漢詩界の鬼才として冷く知られてる
 らが、明治文壇初期の批評家として、落天情
 仙の名で活躍してゐた。 ~~病軀を思ひて~~ 貞女出版 ~~病軀を思ひて~~
 小波の紙上で、 ~~病軀を思ひて~~ 自分の ~~病軀を思ひて~~ 花の杖 ~~病軀を思ひて~~
 批評して ~~病軀を思ひて~~ 自分は ~~病軀を思ひて~~ 忘れ難き知己の
 一人で有つた。 ~~病軀を思ひて~~ 身体は異状を見てゐた
 困つた ~~病軀を思ひて~~ 既 ~~病軀を思ひて~~ ~~病軀を思ひて~~
 二十六年の春、 ~~病軀を思ひて~~ 都の小波の宅で遊
 んでゐるに ~~病軀を思ひて~~ 来た ~~病軀を思ひて~~ 一力の ~~病軀を思ひて~~ 出明 ~~病軀を思ひて~~
 東岸の某様は一泊する ~~病軀を思ひて~~ 事 ~~病軀を思ひて~~ 成 ~~病軀を思ひて~~ ~~病軀を思ひて~~
 A 10 20 ~~病軀を思ひて~~

4 水

の他、村松若菜と心人がある。このは狂歌
 と長じ、假名垣一派の古い文士と心人が知
 られる。
 比夜塚越七平の家は一泊。翌日同別荘に追
 慕文藝會を聞き、帰途には又前の三人と成つ
 る。この車中で花が自分に向つて一人
 生の寂寥——と就て語り耐えぬ。何んとか
 て救われる道は有るまいかと訴へられた。
 自分は、頭腦が悪いので、それは何の趣味
 も隠れなほ好いんわう。歌への遺跡探検も加

焼討事件

明治三十八年夏

山口寒水の追悼會を甲香保で開くので、
 同日江水社員——と寒水と同縣の田山花乳、
 竹貫佳水の二人を伴ひ、六月二十五日、暮崎
 下車、松美佐雄等と出迎へらる。馬車路
 道で流川へ行き、それから徒歩で石原村に寒
 水の墓参。比夜伊香保町の歡迎會が、金子夫ホ
 テルに催されぬが、主人側は先日本暮越太夫

5/26

4

入し給へふんどえつて慰められ、豈に園さん
や以時分には、樹の蔭に事件の最中かの
で、彼の訴へれりといふ自分の慰めたりといふ、全
然違ひ違つてゐるや、後で知つて、何んか、
馬鹿あつてゐるや、然る口走つて苦笑し
れりであつた。

二六 連載中の「海賊の子」は、夏期の
讀物として、餘りよボテくして、暑苦
いので、前篇として一先づ打切り、夏中は涼味
のある人情物として、自分の心遣いで、雨乞い
の

A 1020 青い 三回編記

八月

といふのを、二十三日の連載した。舞台を
伊香保を取つたのは、先日の土曜であつた。同
社の兎太郎と柳紅日一が方が佳いといふ
つてゐる。さらには海賊の子が、悪いといふ
反語のよ知れふかつら、矢張り自分として
は得意の作で、後々今古堂の出版した。

九 月六日の夜、自分は庭前の秋の露を見ふ

が、海に霞水と涼んでゐる。
大変です。東京の焼酎が始まつて、今内務

No

No

水

大臣の官舎が危険なようです。

官邸は外へ出て来た家内が、^{町の噂を聞いて}切った
いよいよ爆発したと直覚した。

日露協和談判の小村大使の調印と、原野の某
は、いよいよと激印した国民大会のくつれが、
四方を散らす焼討を始めたので、^{以業}全市を
警察と成り、放火、殺人、破壊、東京開市未
曾有の混乱を呈した。この時で有った。

水と共に出たので、南馬場の停車場へ行く
と、いつの間にか待たぬ品川署の刑事が、
A 10 20 津田 三河内海軍部 徳島

平洋線が田
て多々。
自分のためを
桂内閣反対の

二六日、議員と
いふ事を待た知った。
新橋まで電車で
番町に焼か
進まずか
ハ世帯持出
日比谷へ行く
下流と、既
既軍隊が

進まずか
ハ世帯持出
日比谷へ行く
下流と、既
既軍隊が

7水

つれ

日吉町の国民の附は巡査隊で困りてゐ
 る。金六町の小路で暴徒の一隊と出會しつゝ
 で軒下の壁を這り過した。芝口では血迷つ
 る巡査が探偵で暴れ出した。既に傍村を
 食ふ所。非常な不安を感じた。徒歩で品
 川へ帰つたのは一時の事であつた。
 翌日会社して無敵の一夜。とりて実字
 文を草して紙上の指げん。
 この焼討事件の有つた。国民が自分
 は進退維谷

A 10 20 著 三田 三田 三田

No.

するものゆかりの立つた。それは豫て国民の
 依頼で、匿名で小説を寄稿する筈であつたの
 だ。
 手金助のあ借までして

国民は政府の所用新聞で焼討までした掛
 つたのであつた。二六とは実の大衆の間
 でおりで、それへ匿名とはえへ寄稿するといふ
 事は、二股武士の所業に均しく、何時に
 自分は困惑した事はない。

二六と国民

明治三十八年の秋から冬

8/26

同社の鬼不坏の紹介で、隆文館の草村北と
 會見し、海賊の子を同館から出版する事を
 約し。又其機関雜誌新声へ寄稿す
 る事。成つて子持曲玉古渡由原結
 婚。おどおど送らん。新声が佐藤の手を
 何と離れんの、世事情は知らぬ。
 国民へは不知何人の名で、女船長を寄
 稿して掲載さんせらん。直ちなそれを二六
 の社中の噂が出さん。
 私田清、福田和五郎の二人から詰問さんせんの
 で、自分は時ツリ、自分の行為の丹方を
 を耻ぢん。全く男らしく無い事を行つてるん
 のぞ有らん。
 何んとも申しわけ無いが、寧ろ前々より
 の約束で……しりし先方からは二六社員ある
 が、自分も心酔しあひ。その態度を多分酌
 して、匿名で書いてはるが、決してそれを
 自分は好いと思つてゐないで、其罪を謝し
 今日限り退社したい。と云ひ出さん。
 それほど不合理的、国民の方を中止す

同社の鬼不坏の紹介で、隆文館の草村北と
 會見し、海賊の子を同館から出版する事を
 約し。又其機関雜誌新声へ寄稿す
 る事。成つて子持曲玉古渡由原結
 婚。おどおど送らん。新声が佐藤の手を
 何と離れんの、世事情は知らぬ。
 国民へは不知何人の名で、女船長を寄
 稿して掲載さんせらん。直ちなそれを二六
 の社中の噂が出さん。
 私田清、福田和五郎の二人から詰問さんせんの
 で、自分は時ツリ、自分の行為の丹方を
 を耻ぢん。全く男らしく無い事を行つてるん
 のぞ有らん。
 何んとも申しわけ無いが、寧ろ前々より
 の約束で……しりし先方からは二六社員ある
 が、自分も心酔しあひ。その態度を多分酌
 して、匿名で書いてはるが、決してそれを
 自分は好いと思つてゐないで、其罪を謝し
 今日限り退社したい。と云ひ出さん。
 それほど不合理的、国民の方を中止す

會議室へ呼ばれた
 A 10 20 時 三浦清 隆文館

107c

一月八日、谷川東花等の電報を受取つた。
 同人は信州で肺を病マ、帰京後は快方に向い
 てるので、某家へ養子を入つたが、少時不縁と
 成つて再び浪人生活。病氣も次第に重つたの
 で、芝區田町海岸の某家へ下宿した。其の
 佳水、秋衣などが表裏の結果、友人知己が月々
 養子を集めて仕送つてゐた。

俳人谷川東

明治三十九年の初春

No. _____
 おしや
 原稿が
 出たので
 今月どの
 掛け口
 なく、

(女) 水樓記 (赤陽) 書
 海上病を 文藝界へ 雪の丸子
 右陽へ 煙を中央公論へ いづれ
 一月号の原稿を (送) くれ
 この年未だ庭前へ 右古遺物陳列所を
 告げた。名前は大いだが、其室は小さくバラツ
 キ式配置の思ひよかつた。併し内部の貴物
 多し。

A 1020 書 三河 齋藤 源三郎

文藝俱樂部

No. _____

捕鯨行のついで
 明治三十九年の春の上
 著作の他は相寄らず古蹟めぐり及び相
 携ふ熱中してゐたが、一月二十二日日本流
 の川柳家近藤館（京魚）井上剣花坊の七日
 を受けて休むまで、捕鯨視察を行つて見ぬの
 と勧誘した。東洋捕鯨株式会社。朝鮮海に於
 て盛んな事業としてゐる。それを見物として賞
 味いとりふのが有つた。海軍小説家をして
 任ぶるるがけな、べき教員は雨澤と佐藤

る他の国民への船舶長の後を、今度の本
 名で新造氣と云ふのを寄稿しようとした。
 元旦
 一月十日は、佐東の葬を、阿久谷中で行
 った。會葬者は、塚原、藤洲（徳祐園）
 榎野、乾（寛）内海、月林、柳川、春葉、等、
 有つた。茶室の藤村の、直ちの五重塔下の墓
 地へ白骨を運んで、有つた。その骨を運ぶ
 二、行く筈を、イキナリ鉄幹が引抱へて歩き、
 出た。墓標を引抱いて、先づ立つた。自分も、頼み、
 引抱へた。ち陽の、さつのは、十五日である。

167/5

鳴鶴館に二泊した。

柳浪はあが今はどろいてるが、神樂坂に用事が有ると云つて唯一人で一泊の後倉皇と去つた。

三月^{中旬}、本郷で、高田、伊井、河合、藤沢、佐藤の一社で、野山とついで海づら、以中、自分の林間の高塔を無断で取り去つた。高田と伊井は無断興行の常習犯者で有つた。

三月二十日は丸裸で体重を取つて見た。

A 1020 書山 三河屋紙店蔵

No. _____

十四貫九百五十目有つた。(先年助川では着衣下穿き、紙入と銅貨を入れて、十三貫七百六十目)の無かつた。これまでは種々の合く相撲のお蔭)

捕鯨船に乗る

明治三十九年の春の下

延びく、成るるに捕鯨行い、いよく確立して、四月三日、築地の金水館で、社長の岡十郎と會見した。五日には旅費として三百円を

No. _____

水

ナ、ワシナを、高利貸の差押へりて、
 突然休演の大混雑中ふりて、別の日会催
 してくれ。自分と赤兎を急ぐりて、直ち神
 戸を行き、^{下関行}汽車を待つ間、神戸新聞を
 一冊読む。——往年を懐くを感慨を耐えりか
 づ。
 朝鮮海捕鯨の記事は、国民の連載し、後
 博文館の捕鯨船として単行本で出版
 し、その要す。(その捕鯨船の中、一節を採
 録し、佐々政一編の新撰国語讀本あり。

No. _____

種

受取る。六日は国民の、捕鯨記事と
 依頼して五十円を送つて来る。
 別の硯友社へ十ヶ高堂出版部)の補助金と
 して、二百円を受取つて、自分の留守中の手
 紙を出る。有つ。(博文館編輯員一同が、
 別の日トランクを贈る。又、二六の編輯有志が、宝亭で送別会を催
 七日の出発。八日は大阪に着いて、大阪ホ
 テルに川上音二郎を訪ふ。
 どうして来りんです。
 鯨を取りに行くん。
 彼は痛情が、つれけれど、其時興行中のモ
 の脚本

A 10 26 博文館 三河高堂出版部

No. _____

種

水 19

頭の問題

明治三十九年の夏 秘

時事新報の甲坂梅雪が七月十七日まで、
冒險小説をとり流文で有つた。それで朝鮮
海捕鯨を背景に人種争闘を材料として、寒朝
暗潮を寄稿する事を約した。
~~十月十七日~~
連載

虹の松原を草して右陽に送つた後、右
の食指を相撲で傷り、それが加膿したのを、
於痛甚しく、執筆に差支へた時は、幸ひ
松美佐雄

A 10 20 青山 三河屋紙房製

No

が、突食したのを、口授を筆記せしめてるのを、
三十日ほどに頭切開した。昨日、大阪の吉弘白
眼の娘政子(九歳?)が単獨で富士登山をした
帰途がと云つて、喜多村録郎が車に乗せて来た。

帝国画報の依頼で、抹殺画の

短編を八月十五日に寄稿した。これを待た
露国文藝ピョートル、チエーキンといふのが
譯して、露国の某雑誌に掲載したとて、同人は
後年、自宅を訪れた。

短かい物を以て間まいり、書いたが、新聞

No

和

ワノ鹿嶋灘と改題して出版)

十月六日、東京人類学会の創立二十二年

記念会を、帝大人類学教室で開催し、

集会所(会員の頭蓋の廣狹を測定して、其指示

数を算出する事)を成した。

総員三十九名を測定機を掛けて分類し、結

果は、

(長頭) 才徳川達孝、他一人。

(中頭) 大森房吉、坪井正五郎、蜂須賀

正韶、他六人。

ニッ引受けてさへ、日記の中は——貧骨の
徹す——と處々書き添えてある。次第ふり、相
寄らず借金の利子は追ひ捲きかかっている。(叔父
水原が保管してある江見家の僅少の財産と、
叔父の失敗と昔の寂奈々々を成すところの
心)
そこへ、草村北星の紹介で九州日日新聞
の宮崎大次郎が訪ねて来て、小説を所望して
行つたので、一イキ吐けん。麻嶋香取とい
ふ題名で九月十五日より連載し、(後、今古堂と

水

れ等で、これよりなる我々が
 当日、その頭の名目、長頭派の桑原博樹
 徳川達孝、中頭派の坪井正五郎、短頭派の白
 井光太郎、過短頭派の新村出及び自分との六
 人が、会より賞品を授與された。(東京人類学
 會雜誌——第二十二卷第二百四十七號参照)
 文士で頭の大さいりでは、小林云龍、石橋
 思案の二人が、それらと比べると自分の頭に
 底問題の成りゆき ~~竹~~ 自分には ~~事~~ 実行
 よりも間口が広い。それで言はん不結果に成つ

吉吉

No

(短頭)——二條基弘、中田常恵、山崎直方、
 平福百穂、松村瞭、白井光太郎、八
 木壮三郎、中澤澄男、他十二人。
 (過短頭)——新村出、他七人。
 三十九人の中で最小が桑原博樹の七三・五
 で、最大が新村出の九〇・七。
 自分が自分は意外にも、最大長徑(一七六)
 最大幅徑(一五七) (廣狹指示板が(八九・二)
 としふ事で、新村出の寺崎留吉、その三番
 目の大頭で、~~事~~ 學術的確定され

A 10 20 海山 三三三三三三三三三三

ミロヤート

No

22水

堂から 水中の結晶と改題と出版し
 十二月二日、大町桂月會まで、神田
 橋端の和強學堂で文藝講演會の第六回を開く
 事になり、自分の辯じる様子を勸誘して来る
 この日松本道別が入獄中の家計を補助する目
 的とか、井土、山縣五十雄、越嶋羽衣、宮
 嶋五太郎、田中舍身其他で有つたが、自分は
 捕鯨誌を早く引下つた。
 年末の豫言と種々書いた中で、右陽の
 日送つた、遊牧民の聊い得意の作で有つた。

かがり知れぬ。(自分の腦の一部は確かな缺
 陥がある。それは算数の智能を全く具備して
 ゐない点だ。自分は多技多能だと信じてゐる
 が、算数の前は~~低能~~低能兒だ)
 十一月十一日は、人類學會の遠足會が、
 下總園生見場にて催された。自分は林玄川
 松本依雄の二人を連れて行き、栗原登壇を試み
 るが、珍奇の出土品は獲らなかつた。
 小樽新聞の「海底の噴火」を大阪日報
 へ「奇蹟」を送る事になり、(後者は今古

20 水

一月七日、身長を量つた、五尺五寸五分で有つた。昨日福田英子（大井篤太郎著）（旧姓景山）（朝鮮）事件の一人で、同郷人（訪ねて来て、先年の苦境の瓜瓞のモデル問題の苦境一丁出た、要するに雑誌を出して、原稿をもらって、いふので有つた。則ち三千年前の相愛といふのを復して、送つた。此時分、女の相愛が古流行ぶのを有つた。

十五日、三宜亭で新年宴會を開いた。會員二十五人（天保、花袋、萍水、古雪、東島

No. _____

吉

山岡

族の漂流生活を取材したものは、（？）く之が、葛矢と男。
十二月十六日の紅葉祭、色懺悔の楽場の巻、狹衣、袴、鬼太郎、西男昔を懐かし、堀野文祿が大薩摩を唄つた。自分は色懺悔上場、就て山の講演を試みた。（この十二月の収入が、四百三十四円五十銭で、例年より比べるに上出来で有つた。）

12月、~~山岡~~ 新年宴會
明治四十年の春

A 10 20 青い 三四五 山岡

No. _____

水書(會費が六十銭で、それで酒食して頼
むと二人まで呼んじ。

この日田村西男が三直亭を經營してゐたの
で——一番安い會費で一番面白い宴會のレコ
ードを作ると見る、と、いふので行けたらしい。
つぎ紙子を脱稿したのは二月四日、
日、成田不動の節分會を参した。大野を二
泊して、各新聞記者團と昔、参籠者の頭上
を泳ぐ様子を、須彌壇下までヤツと行き着い
たが、途中欄間の鉄網がブラ下るあとの危険

A 10 20 青い三回無罪記事

を犯したので、其時萬朝の記者で有
つた沼波環音が、その記事を明細に書いた。

この時の年男は尾上梅幸、力士の国見山
あどがゐた。年男が豆を撤く前、
棒を向本意の方に向つて投げるので有つた。
自分は其時、諸国とソふ土地の顔役の
足元の印し絆纏を着てゐたが、その
で須彌壇下の正へは、
擽げて身掻へたので、年男の豆は、非学で山
中へ、
普通の高詣者は一粒の

257c

大坂日報の「野蠻人」の「二十三日」の「送り始め」の「後、嵩山堂より出版。映画とある」
 三十日、大橋進一の結婚披露の「園遊会」が、向嶋札幌ビル庭園で開かれたが、この来賓中に岡山県令を以てする高崎五六の息子の女が、^{男爵}招かれてゐる。小学校の同級生で、^{五十}有つて、三十年目で邂逅したのだが、顔は互ひに見覚えてゐる、名乗り合ひはしなかつた。其時の女名の言葉が振るゐる。

No. _____

吉

この頃、単行本出版の校正は進められた。それは、捕鯨船の博文館。東島海を今古堂。無人島の成功雜誌社。

~~三月九日は、久留島を主催で、お伽傳樂部の教課書を用ゐる。講師は土肥春晴。~~

三月九日は、久留島を主催で、お伽傳樂部の教課書を用ゐる。講師は土肥春晴。

A 10 20 海山 三回遊覧記

無人島の成功雜誌社。

豆で貴く拾ふのを、為せざるを得ない。有つて、後で世話人から苦情が出て、お伽傳樂部を退社する。お伽傳樂部は止して、お伽傳樂部は有つて。

No. _____

水 27

西侯の文士招待

明治二十年の初夏

博文館で二十周年を記念するもの、
 臨時増刊として、ふた昔を發行する。その
 文藝部

す、櫻井の作家二十人の中より自分も加へる
 られ。

- | | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|
| 笠村 | 得知 | 南翠 | 美妙 | 水蔭 | 霞亭 |
| 藤村 | 花袋 | 鏡花 | 小波 | 藤水 | 春葉 |
| 獨歩 | 秋声 | 嵐柳 | 三味 | 露伴 | 柳浪 |
| 眉山 | 思堂 | | | | |

A 10 20 青い 三河屋新聞

それで自分は 蛇窪の踏切
 の小説を送った。その当時としては思い切
 りな新刊の材料で、死の一步前の果敢を以て未
 可解の釋明を得たといふので、自分としては
 今猶傑作と信じてゐるが、その時は、獨歩の
 批評がひどく、それを取扱つて、
 五月に入つて、京華日報に、恋の學問
 と連載した。(後單行本が映画)
 六月二日、紅葉館で、羽の七周年として

28次

世当りの文豪
 龍水、愚索、抱月、白鳥、
 赤城、世他、八海、
 白分のみ、
 招待す、招待され、
 問題、
 仲間、ハズレ、
 愉快、
 慰問を多量に得る。新聞紙上でも、自分の偏

他、
 招待す、招待され、
 問題、
 仲間、ハズレ、
 愉快、
 慰問を多量に得る。新聞紙上でも、自分の偏

博會を聞い、徳富蘇峯、志賀劍川、柳田泉
 惠三家の懐旧談、其他餘興教書。来會者二百餘
 名で有つた。
 時の首相西園寺侯が文士を招待して一夕の
 閑話と聞けり。六月十四日の紙上で世人選が
 発表され、それは、露伴、小波、池柳、
 魯庵、柳田、眉山、漱石、二葉亭、桂月、宙
 外、藤村、鏡花、風葉、獨歩、和声、花袋、
 春葉、天外の顔解で、自分は漏れてゐる。(道達、
 二葉亭、漱石は、謝と行かぬ)。

29 水

最新江見水産と一ヶ月を消して桂月と書
 き変へるは(文壇小僧) 信例は
 これを併し自分は信ふかつた。伊藤代
 三又や国本田獨歩の二の伊藤代
 議士の手で隆文館を計るわけよく、計つて
 北星は自分よ好意を持つてゐるから
 一然う今日も信じてゐる。
 十五日、越中島の水産講習所の講堂で、
 全生徒の捕鯊談を聞かせた。その上野の
 精養軒までつた。こゝでは博文館の二十周年

水産と蓋花を述べたのは、招待して拒絶
 するにしろと先を見越してゐるのと云ふ記事が
 見えぬ。
 萬朝報にはたのむが投書が載せられて
 西園寺首相の文士招待は就いて女人選
 の内幕を言へば、政友会の伊藤代議士が
 書肆隆文館の編輯員に到り、草村北星以
 下同編輯員に人選を頼んで、その採
 用されたが、大町桂月が加はつたのも、

水 20

この招待會 日十七日 相の私邸で催されて、
 翌日の各新聞は、お調子で記事の精密を競ひ、
 或社では文士の一人の帰途を拉して、符合を連
 れて行き、当夜の記事を書かせるといふ。
 自分は当日、旅館と車にて、能見在末吉貝場 天草中旅行をして、畑の中を
 握飯を食つた。同行者の中は林和りる。
 七月一日夕方、国民の招待された。相
 客は村上浪六で、主人側は徳富蘇峰先生
 を初め、阿部克家、栗原武三、山川瑞三、
 陸隆、海 鵜野、鵜野 鄭、其他数氏で有つた。

No

祝賀會が開かれて、其数は千餘名。文士連中も
 大概顔を揃へたが、噂は首相の文士招待で持
 ちで、その選入つた連中の噂の荒いさ
 と云つた。さうで天下で取つたのかの様
 内田魯庵の如きは、
 自分 は当然 招待されたといふ。自惚れを
 中 は 選入 は 偏ら は 知れ は ない。と云ふ。ニヨゲてゐる。
 者があつた。知れ は ない。と云ふ。
 偏ら は ない。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。
 傲語 は ない。と云ふ。自分は は 特 は 記 は した は ない。

A 10 20 青山 三三 昭和四年

No

朝野の名士は云ふまで、
 ぶく



